

上役のいない月曜日

赤川次郎





赤川次郎（あかがわ・じろう）

本名。昭和23年2月生れ。桐朋高等学校卒業。51年「幽霊列車」で第15回オール讀物推理新人賞受賞。著書に「マリオネットの罠」「幽霊列車」「幽霊候補生」（文藝春秋）、「三毛猫ホームズの推理」（光文社）などがある。

上役のない月曜日

昭和五十五年三月三十日 第一刷
昭和五十七年六月二十五日 第十刷

定価 八五〇円

著者 赤川次郎

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三

電話（〇三）二六五・一二一

印刷 凸版印刷

製本所 中島製本

万一、落丁等の場合は

お取替致します

© Jiro Akagawa 1980

Printed in Japan

目次

上役のいない月曜日	5
花束のない送別会	59
禁酒の日	109
徒歩十五分	157
見えない手の殺人	205

上役のいない月曜日

裴頓 佐伯俊男

上役のいない月曜日

塩沢圭一は不満だった。

修理工場のおやじが安い給料で人をこき使うのに不満だった。今度会った時には寝ると約束していた女が、自分に黙ってアパートを変えていなくなってしまったのも不満だった。給料まで一週間あるのに、全財産の五千円札を入れた財布を落としてしまったのも、前借りをビシヤリと断られたのも、バチンコがまるで入らなかったのも、晩飯に食ったカツ丼のカツがやけに小さかったのも、要するに何もかもが不満だったのである。

圭一は、TVの刑事物に出て来る不良少年のようなセリフを呟いた。

「世の中が悪いんだ……」

仕事は夜中までかかって、やっと終った。金びかのモデルガンを、マジックインキで真っ黒に塗りたくったのだ。やればやるほど本物らしく見えなくなるようで、いやになったが、それでも

まあ何とかこの辺で手を打とうという気になった。

それからただ一つ残っていたカップラーメンを作って食べた。

「さて……。どこをやるかなあ」

銀行とか、そんな所はともやる気になれなかった。逆に撃たれて死んじまっちゃ、元も子もなくなる。圭一は大金を手に入れようというわけではなかった。ただ当座、ちょっと遊べて、ちょっと旨いものを食べられる……。その金があればいい、と思っていたのだ。

電話ボックスから失敬して来た電話帳を開いた。片手にボールペンを持ち、目をつぶって、

「エイッ！」

と電話帳へ突き立てる。「よし、ここだ！」

と覗き込んで、

「〈M警備保障〉？——こいつはだめだ！」

慌ててページをめくって、もう一度、

「エイッ！」

とボールペンの先を下ろす。覗いてみると、あまり聞いたことのない——いや、まるで聞いたことのない会社だった。

「M文具でございます」

電話を取って、片岡寿子は欠伸をした。「もしもし——あ！社、社長ですか！おはようご

ございます！」

一度に眠気がふっ飛んだ。

「は、はい！——はい、分りました」

受話器を置くと、所狭しと段ボールの箱が積んである通路をすり抜けるようにして社長室へ。ドアを開けると、秘書の湯浅敏江がコンバクトを慌てて閉じる。

「何だ、寿子さんか、驚かさないでよ」

「お化粧してて大丈夫よ。今、社長から電話でね、頭痛がするから休むって」

「あら、そう。他に伝言は？」

「ええ。何か言ってたわ。ええと……そうだタイプの原稿を取りに行っておいてくれって」

「そう。分ったわ、サンキュー」

「今日はいいい天気ね。外出もいいわね、こんな時は」

片岡寿子が行ってしまうと、湯浅敏江は急に浮き浮きした様子になって、コンバクトを覗き込み、色っぽいと定評のある笑顔を映して軽く口笛を吹いた。

寿子は席へ戻って、時計を見た。

八時五十分。事務所を見回して、

「あら、今朝は偉い方がまだ一人も来てないのね」

と呟いた。営業の猪谷課長、経理の大森課長、配送の竹本課長、庶務の——寿子の親玉でもある——三橋課長。みんなまだ顔を見せていない。

「珍しいこともあるもんだわ」

大体、課長クラスが早く事務所へ来るのは、真面目だからじゃなくて、課長ぐらいになるとみんな自分の家を建てる。建てるとなると今や遠距離通勤が常識。そうなるといやでも電車の都合で早く着かざるを得ないのである。

寿子は課長の机の上にクリップで止めてあった休暇届を取って来ると、タイムレコーダーのすぐわきにある黒板に向った。へ休暇」という欄へ白墨でまずへ水上」と書き込む。社長である。へ大森へ竹本」……。

急ぎ足で事務所へ入って来た経理の若手社員、島本が自分のタイムカードを取りながら黒板を見た。

「おっ、うちの課長、休みか。ツイてるぞ」

社長と課長二人がお休みか、と寿子は残る二人の休暇——これは平社員だ——を書き込みながら呟いた。今日の事務所は大分のんびりしそう。ちょうどいいわ。月曜日だものね、今日は……。

課長でもなく、家も遠くないのに早く来ているのは、やはり真面目という他はあるまい。——経理の四つのデスクに、毎朝必ず一番に坐るのは中江だった。別に仕事をしてるわけではなく、新聞を読んでいるだけなので、なぜ早く来ているのか、誰も知らなかった。本人も知らなかった。ただ中江は習慣を変えない男なのである。

中江は四十三歳だった。年齢からいけば、大森課長の次ののだが……。

「おはようございます」

島本が席について言った。「課長、お休みなんですわ」

中江は新聞から顔を上げて、

「そうかい？ 聞かなかったよ」

と、まあこの程度の扱いなのである。

「ええ？ 本当？」

寿子は思わず訊き返した。

「本当よ。どうして？」

営業の、寿子と仲の良い峰岸涼子が不思議そうな顔をした。

「それじゃ本当に猪谷課長、お休みなのね？」

「うん。昨日——じゃないや、土曜日、帰り際に言われたの」

「驚いたわね！ 今日はずちの課長以外、管理職全員休みよ」

「あら本当？ へえ！ 偶然ね」

「たまにはいいわね、息抜きできて」

「そうよね。——ねえ、女の子だけでケーキ買って来て食べない？」

「いいわね！ お金は？」

「あみだ作って決めようよ。十円から五百円まで。私、作る！」

「頼むわ」

こういうことにかけては人一倍熱心な涼子が急いで席に戻って行く。寿子は時計を見た。八時五十八分。——ふと寿子の視線が、三橋課長の椅子へ落ちた。いつも必ず五分前には来るはずなのに。

「まさか……」

そんなこと、あるわけじゃないの！

長谷川は、駅を出ると、M文具株式会社への道をひたすら走っていた。走りたくはないのに走るとするのは、苦しいものである。それも九時までに目的地へ着かなければならず、現在、駅の時計を信用すれば八時五十八分なのだから、苦しさはいやが上にも増すのだった。

駅の時計が進んでいるか、会社の時計が遅れているかしていかればと、祈るような気持ちで考えたが、そんなことがありえないのはよく承知していた。

今日もまた、課長の冷たい視線にさらされながらタイムカードに赤字で印字されるのだ。へ九・〇一〇とかへ九・〇二〇と。息切れがして、足取りが遅くなる。こうなったら、後は遅刻届にどう理由を書くかを考えよう、と諦めて、ついに普通の足取りで歩き始めた。

長谷川は庶務の十年選手である。三橋課長に怒鳴られ、どやされつつ、十年が過ぎて、今は三十三歳。まだ独身。早くも腹が始めて、近視。童顔ながら、美男子とは言いかねた。遅刻、週平均二・五回。これは高校時代とほぼ同じだった。

「今日は……電車が遅れたことにするか」

しかし、この間、これは使ったばかりだ。

「仕方ないや。ただの寝坊だ」

課長にブツブツ言われない唯一の方法は、席へついてすぐ、あちこちへ電話をかけることである。今日は月曜日だ。電話する用が三、四件はある。よし、またその手で行こう。長谷川は「M文具株式会社」と書かれたガラス戸を押した。――付け加えると、彼の名は一夫という。

「――おはようございます」

寿子は少々馬鹿丁寧に、頭さえ下げながら、電話の向うの三橋課長夫人に挨拶した。「はい。――そうですか。かしこまりました。お大事に……」

ホッとため息を洩らすと、席を立て、黒板の「休暇」の欄に書き加えた。「三橋」と。そこへ長谷川がやって来た。まだ息を切らしている。

「おはよう、片岡君」

「おはようございます。もうチャイムが鳴りましたよ」

「分ってるよ！ 何もそんな大きな声で――」

と言いかけて、三橋課長の席が空いているのを見た。それから何となく事務所を見回して、

「何だ、幹部会議かい？ 今日月曜だろう？」

「……冗談だろう！」

「ところが本当なんです。正真正銘、折紙つきの本当」

「畜生！ 走って来るんじゃない！」

長谷川は本音を口に出した。

M文具株式会社。社員数四十四名。その内倉庫勤務二十名。事務所二十四名。業務内容、文具一般の卸売。オフィスは平屋建ての、ちょっと見には個人の住宅風。住宅地のマンションやらアパートがひしめき合うように立ち並ぶ一角にある。オフィスと同じ敷地に倉庫が二つ並んで、トラックが出入りしている。

景気はそう良くも悪くもない。文具そのものが、売行きにそう波のある商品ではないし、ここを創設した現水上社長が、堅実をモットーに、学校、幼稚園といった所をお得意にしていたので、他の同業者がキャラクター商品に食われて青息吐息なのに比べると、まずまずの成績を上げていた。

「土曜の夜と日曜の朝」という映画があった。これが一日ずれて、「日曜の夜と月曜の朝」となると、「最低の気分」の同義語になる。だが、この日ばかりは――

「最高の月曜だなあ！」

長谷川はゆっくりお茶をすすった。

「偶然とはいえ、珍しいですね」

と寿子が言った。

「十年来初めてだよ！ こういう時に羽をのばさなきゃな」

「何かあったらどうします？」

「何か、って？」

「課長の決裁を仰ぐようなこと……。その時は誰が代理をするんですか？」

「さあね。課長と名の付く人が一人でも来てればともかく、誰もいないとなるとね……。でも大丈夫さ。何もあるはずないよ」

電話が鳴った。寿子が取って、

「M文具でございます。は？ どちら様で。——あ、ちょっとお待ちを！ あの——」

寿子は受話器を戻した。「切れちゃったわ」

「何だい、一体？」

と長谷川は訊いた。

「井上さんって方です。今からこちらへみえる、って」

「井上？ どここの井上？」

「それが……」

「何だい？」

「M文具を告発する会の会長さんですって」

長谷川は目をバチクリさせた。

中江は伝票から目を上げて、時計を見た。十時半だ。——さっきから中江は迷っていた。せっかく課長が休みなのだ。適当にソロバンを弾く真似でもして骨休みしてもいいが、日頃から棚の